

私の保育ノート

から

ごちゃごちゃと遊ぶ中で

小川知子

三歳の子どもたち ごちゃごちゃロケット

その日、三歳のA児は保育室の椅子を次々と運び、道のような、橋のようなものを作り始めました。あれよあれよという間に、椅子が保育室の端から端まで並びます。面白そうなものができている、何かが始まりそう、という雰囲気に取り寄せられたのです。ようか、次々と子どもたちが集まってきました。作っているA児自身も、友達が集まってくることをうれしそうに受け入れていました。はじめは整然と真つすぐ並んでいた椅子でしたが、徐々に変化が出てきます。A児が椅子を動かすと、それをまねるように

一緒に動かすB児がいたり、部屋の隅の方に隠れている椅子までもさらに引っ張り出してくるC児がいたりして、場はどんどん変化していきます。

「あらまあ！」

別の場合へ出向いた後に戻ってきた私は、目を丸くしました。ぎゅっと保育室の中央に集まっている椅子の真ん中に、ままごとコーナーに置いてあったテーブルがどっかりと乗っていたのです。その周りには子どもたちのにぎやかな声。傾いて椅子から落ちそうになっているテーブルを、慌てて真つすぐに戻し、ほっとする私。『ああ崩れないでよかった』。しかし私の心配をよそに、さらにものが運ばれていき

ます。

ままごとのごちそう、お皿、じゅうたん、ぬいぐるみたち……。足の踏み場もないような場で、子どもたちがたくさんのものに囲まれています。「靴を脱がないとダメ」。私に笑顔で教えてくれる子がいきました。確かに、いつの間にか子どもたちは皆はだしになっていて、椅子の下に靴があちらを向いたり、ひっくり返ったりして置かれていました。最後は、その場がロケットに見立てられ、ごちゃごちゃな中に何人もの子どもが乗り込み、思い思いの行き先に向かって出発していききました。

「僕が運転する」「私が運転する」「ビュー」「もう着きました」「まだ降りちゃダメ」

口々に違うことを言いながらも、友達や先生と身を寄せ合って乗っていることがうれしくて、楽しくて仕方ないという雰囲気があふれていました。

私は、今年度初めて三歳児の担任を受けもつてい

ます。四月からの生活はまさに、未知との遭遇。冒頭のような場面で、私の予想を超えてごちゃごちゃと遊ぶ子どもたちの姿に、一瞬たじろぎ、思考も動きも停止、という時も少なくありません。担任の私だけがジタバタと慌てたり、どぎまぎする心を封印して平静を装ったり、とっさにとった自分の行動を保育後にずつしりと悩んだり……。

『ごちゃごちゃ』という表現で子どもの姿を表すことの中に、最初は少なからず否定の意味を込めてしまいう面が私にはありました。

『何であんなにごちゃごちゃするんだらう』

『でも、何であんなに楽しそうなんだらう』

そんな思いを抱えながら子どもたちの姿を振り返った時に、数年前に担任していた四歳の子どものたちの姿が思い浮かんできたのです。

四歳の子どもたち 小さな実験者たち

砂場遊びが大好きで、連日砂場でよく遊ぶ子ども

たちでした。それに伴い、砂場の砂はどんどん減り、とうとう夏休みに、砂を足すことになりました。なみなみと新しい砂が入られ、白くさらさら光る砂場。長い休みが明けて戻ってきた子どもたちは、この砂場でどうやって遊び始めるのだろうと、思いをはせながら砂場を眺めていたことを思い出します。

そして迎えた二学期。長い休み、と思っていたのは私だけで、子どもたちは時間の空白などなかったかのようにあっさりと、自然に、園の生活に戻っていききました。「さあ遊ぼう」。一学期と寸分変わらない様子で砂場に飛び出る姿を見て、『砂場の変化に気付くかしら?』と私は興味津々でした。靴下を軽やかに脱ぎ、はだしで砂場に入った子どもが「海みたい!」と声を上げます。砂浜を思い起こしたのでしょうか。周りの子どもたちもその声を聞き、慌ててはだしになったり、手をつ突っ込んでみたりして、砂の感触を確かめていました。

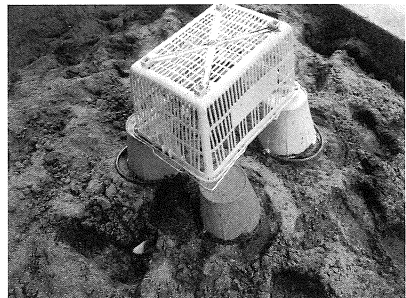
はだしで砂場をひとしきり歩いたある子が、おもむろにバケツを四つ、砂場に並べました。そして、

何かがひらめいたように、バケツの上に、砂場の道具を入れていた面白い物かご（スーパーマーケットで使うようなプラスチックのもの）をひっくり返して乗せたのです。さらにその上から、じょうろで水をかけていききました。

「雨だ!」

面白い物かごの網目をちよろちよろと水がつたい、しずくが少しずつ大きくなり、耐え切れなくなったりしずくが、ぽたりと落ちます。落ちたしずくは、残暑厳しい九月の日差しでさらさらに乾いた白い砂にどんどんどんどんしみ込んでいきました。その様子は、広い大地に雨がしみ込んでいくさまそのものだと、私も興奮気味にその場で眺めていました。

『雨』を楽しんだ後、子どもたちは砂場にかがみ込んで、いろいろな道具を次々と砂の中に差し込み始



めました。いろいろ試した結果、使い勝手が一番よかったのは、じょうろだったようです。水を入れたじょうろを、角度を変えながら砂の中に差し込みました。すると、乾いた砂の少し深い所からしみがでてきた水が、じわりじわりと砂場の表面を黒く変化させていったのです。

「水が地下を流れて湧いてる。(砂が少し) 動くから(ここの下から水が) 出てるってこと」

「見えない水だね」

「(見えないけれど) でも(砂が) 黒くなっているから、水が通っているってこと(がわかるね)」

子どもたちは自分の気付きを言葉にしていました。新しい砂が足された砂場で、いつもとは違う感触を味わい、ほんの少しの変化を感じ、自分なりの表現で実験結果を報告し合っている姿。自分の発見したことを、友達や先生に伝えずにはいられない姿。それらの子どもたちの姿は、まるで小さな実験者たちのようでした。

スコップ、型抜き、じ

ょうご、ふるい。砂場には砂場道具がたくさん置いてあります。でもあの時、子どもたちはそのような砂場道具ではなく、買い物かごを手に取り、それを逆さまにして、砂場に雨を降らせたのです。子どもたちは数

あるものの中から、柔軟な発想でものを遊びに取り入れて、『こうしたらどうなるのだろう』と興味を持ったことをやってみようとしていました。あの時、買い物かごやじょうろを取り入れたからこそ、新しい発見や驚きを味わえたと思うのですが、それらのものを選び取った子どもたちには、ワクワクすることに対して貪欲にかかわろうとする気持ちが根底に育っていたのではないのでしょうか。



『うつしてみたい』という思いの広がり

三歳の子どもたちは、A児の姿をまねて同じように、自分の選んだものを次々と運び込んでいました。そうやって自分の体を動かしているうちに、これを運んでみよう、あれも動かしてみようと、一人ひとりの心までもが動いてきたのではないでしょうか。自分が選んだものと、『うつしてみたい』という自分の思いをそれぞれの子どもが運び込んでいました。それぞれの子どもがそのようにして自由にやりたいことを表し合う中で、子ども同士が出会い、なお一層楽しくなっていく体験をしていたと思うのです。

四歳の子どもたちは、何かが始まろうとする場を目の前にし、『こうなったら面白いかもしれない』『こうしたらどうなるのだろう』と自分なりの考えに合わせてものを選んで運び込み、柔軟な発想で試していました。ものを使って、具体的に自分のやりたいことを表すことで、どの子の目にも明らかに、

『雨』が降ったことがわかりました。そうやって同じものを見つめ合う中で、自分なりの発見や驚き、感動を友達と伝え合いたくなるような状況が生まれたのだと思います。

必要だと考えたものを選んで運び込む、同じものを見て感じ合う、考えたことを伝え合う。そのようにして、自分のやりたい遊びの中で友達とのつながりを深めて遊ぶ四歳の子どもたちの姿。この四歳での姿の始まりは、三歳の子どもたちが体を動かし心を動かし、一人ひとりがやりたいことを楽しむ中で友達と出会う姿の中にあるのだと私は思いました。

つながる、つながる！

幼稚園にある石畳の川。三歳の子どもがやって来て、バケツから水をこぼしました。乾いて灰色だった石畳は、ぬれたところだけ黒くなります。少し離れた水道から、もう一杯水をくんできて、また水をこぼします。先ほどぬれた部分をゆつくりと追いかけるような水。それを見て、「つながる、つながる！」

と、うれしそうに声を上げます。近くにいた子どもたちも、何だろうと近寄ってきました。そしていろいろなものに水を入れてきて、同じように水をこぼし始めました。ある子は小さなコップで水を運び、ある子は小さな型抜きで水を運び、ある子はバケツに入れた水を途中にほとんどこぼしながらも最後の数滴を川に落としています。そのようなことを、子どもたちは実に生き生きと、そして繰り返し取り組んでいました。すると、はじめは小さなはずでしかなかったものが、重なり合い、ちよろちよると流れや動きを生み出していったのです。



一人ひとりが自分で選んだものを運び込み、やりたいことを楽しむ中で、友達と出会い、一人の時には思いも寄らなかった楽しみを味わっている三歳の子どもたちの姿。それはまるで、石畳の川の上で小さなはずが重なつて徐々に流れを生み出すようなものかもしれません。自分のやりたいことを存分に楽しむ経験を重ねる中で、時には友達と動きが重なり、一緒に取り組むことで生まれる楽しさやワクワクの『始まり』を見いだす。このことが、三歳の今の時期にとっても大事なのだと私は思います。

今日も三歳の子どもたちが、一人ひとりの運んだものをめいっばい運び込んで遊んでいます。一見『こちゃこちゃ』にも見える、でも一人ひとりの思いがめいっばい詰め込まれた大切なその空間で、子ども同士のつながりをしっかりと感じながら保育をしています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)